



ジャンケン先生はみんなに聞きました。「作文のきれいな人、手を挙げて。」ほとんどの人が手を上げました。メダちゃんも手を上げました。先生「これから作文の勉強をします。作文が大好きになるよう、先生がみんなに魔法をかけます。」

メダちゃんは「魔法はほんとかな」とうたがったのですが、「ほんとうだといいなあ」とも思いました。前の勉強で漢字練習が好きになったので、「作文も好きになりたい」と思ったからです。

勉強が始まりました。先生は「たくさん書かなくていい。3行だけ書けばいい」と言うのです。メダちゃんはうれしくなりました。「3行、書けばいいのだ。これなら簡単だ、すぐ書ける。なんだか、やる気が出てきた。」

「あれっ、変だ」と、メダちゃんは思いました。「私、作文きれいなのに、やる気が出てきた。先生、魔法、かけたのかな。」



先生は「これを見て、作文を書きなさい」と、黒板に写真をはりました。メダちゃんは「何、これ？ 1枚のお皿があるだけだ。」と思いましたが、見たままを書くことにしました。

こんなのでもいいのかと心配しながら、先生に見せました。先生は「題名と名前がありませんね。書きなさい。」と言いました。メダちゃんは、『白いお皿』メダと書きました。

先生に言いました。「先生、題名と名前を書くと、書くところは2行しかありません。書くところはもっと長いほうがいいと思います。」先生は「そうだね。では、作文用紙は5、6行にしましょうか。」と言いました。「あれ、変だ。私、作文きれいなのに、書くところ長くしてくれなんて言ってしまった。これも魔法かな」

メダちゃんのないしょ話

このあと、先生の魔法が飛び出しのです。私、見えないものが見えたのです。「そんなことあるはずない。」ですよ。でもね、見えたの。それは明日に続く。

い	青		
て	い		
あ	テ		
り	ー		
ま	ブル	白	
し	ク	い	
た	ロス	お	
。	の	皿	
。	上		
。	に		
。	、		
。	白		
。	い		
。	お	メ	
。	皿	ダ	
。	が	。	
。	お		